

続・万葉集の形成（上）

— 平安朝文献の意味 —

中 西 進

△まえがき▽

本稿は昭和四十三年七月発行の「日本文学講座」（三省堂）Ⅰ

「上代文学」の拙稿「万葉集の形成—平安朝文献の意味」の続
篇で、首尾一体をなすものである。彼には (一)序 (二)榮華物語

(三)古今集仮名序 (四)古今集真名序 を載せ、此には (五)古今集の
万葉歌 (六)後撰集まで を載せる。以下 (七)貫之と万葉集 (八)新
撰万葉 (九)歌経標式 (十)結 が未発表である。

五 古今集の万葉歌

万葉卷二十の末尾の歌が宝字三年をもって閉じられて以
来、古今集は唐突に万葉の名を口にするのではない。宝字三
年以後、奈良朝における万葉のあり方は依然として文献の記
すものを得ないが、その後、嵯峨天皇（八〇九—八二二）に

及ぶと、源氏物語（梅が枝）には

嵯峨のみかどの古万葉集をえらびかかせ給へる四卷

という記述が見える。つくり物語の一節たるをもって、その
真偽は疑のないものではないけれども、源語の作者にとつて
偽りを記す必要はなかったはずだから、そのままに信ずるべ
きであろう。源氏物語はこの次につづけて延喜のみかどの古
今和歌集といい、漢風・和風両時代の天皇に万葉・古今の書
写を告げている。これも由あることである。当時、嵯峨（こ
れが古来名手をもって称せられている事は留意されねばなら
ぬが）の筆になる四卷の万葉抄が存したのである。もし万葉
が平城天皇までに亘って形作られて来たのだとすれば、嵯峨
に万葉が継承されることはあり得る事だし、また平城が形成
の側に立つのに対して、次の嵯峨は筆写の側に立っている事
は、ここに一つの区切りの存在することを、明白に示してい
る。そして時あたかも弘仁の漢風時代である。その中でも万

葉はなお余勢を保っているのである。

この時の古万葉集四巻の実体は、もとよりわからぬ。しかし、もし中臣清麿をとおして平城が万葉を目にすることがあったとしたら、それは家持周辺の万葉であったはずだから、あるいは巻十七以下の四巻であったかもしれない。あるいはそれに巻次の先立つ家持万葉も一緒だったか。されば、その平城帝がまだ在世し、それと險悪に対立した嵯峨帝が、その家持万葉を平城から伝受して書写するはずはない。この嵯峨手許の万葉は非家持万葉と定めてよいであろう。

具体的に非家持万葉を指定することは困難だけれども、巻一・二・三といった正格の巻々は家持を経過したものではない。また作者未詳の巻々も、もとより家持への親近さを示してはいない。そうした非家持万葉、あるいは巻十六までの巻々の内の幾何か、それが今嵯峨によって「えらびかかせ給ふ」対象となった万葉であろうと思われる。

またかりに右に述べた清麿経過の家持万葉という事実がなかったとしても、平城に焦点を絞って家持の一來復を考へるのだとしたら、家持は平城に伴って存在し、非平城の世界には存在しない。家持が陽の目を見たことを平城に結びつけて考えれば考へるほど、嵯峨の万葉書写の内容は、非家持のそれであることになるし、また平城における家持の復位が全万葉成立に結びつくものだとしたら、嵯峨の書写は、書写の事実そのままで否定することになるだろう。

したがって、私は平城の世界に存したのは家持万葉であ

り、嵯峨の世界には非家持万葉が存したであろうと推定する。そうすると、ここにすでに二つの万葉が存在したことになるし、その非家持の万葉が「古万葉集」と称せられていることが、俄然大きな問題となるのである。

しかし、文献はその後の万葉の行方を、延喜近くまで示してはくれない。かろうじて貞観の代（八五九—八七六）、文屋有季が万葉とは奈良朝の古歌だと答えた、かの古今集の一首があり、寛平（八八九—八九七）に新撰万葉の序文の立言を見るだけである。この新撰万葉については後に詳しく述べるが、その延喜前夜の後に、醍醐の朝を迎える。

醍醐には万葉集書写のことが知られている。すなわち源氏物語河海抄所引の藤原穩子の日記で、

承平四年十二月九日、御賀、おとどくまかで給ひぬ。

また御贈物、沈のはこ一よろひいれたり。せんだいの御てのまんえうしう、今一には本五まきやまどごと一

という。先帝醍醐の筆による万葉集の存在が知られるのである。これは書写の年代も巻数も不明であるが、古今集勅撰の帝としての醍醐にとつて、万葉集書写はありうべき事である。名手嵯峨にかかるような疑も、これにはない。また、撰者貫之自身にも万葉集抄出の事が一説として存在する。万葉五巻抄は先にもしばしば引いたが、これは和歌現在書目録に「右一説紀貫之」とあり、これを信ずれば貫之における万葉享受も、大きなものがあつたというべきであろう。そして又、栄華物語（御裳著）によれば三条帝の皇女禎子内親王へ

の御贈物として貫之の古今兼明の後撰とならべて小野道風の万葉書写のことが記されている。

道風は醍醐以後朱雀、村上三朝に仕えた能書家だから、その万葉書写はいつの事とも詳かではないが、円融院から一条院に渡ったという道風の万葉はほぼ醍醐や貫之らと時を同じくして書写したものである。

貫之は新撰和歌の序で、

昔延喜之御宇属世之無為因人之有慶会撰進万葉外古今和歌一千篇

といい、明確に万葉を言及し、その「外」に古今集を位置づけている。そして

更降勅命抽其勝矣……貫之未及抽撰分憂赴任政務余景漸以撰定

という。これが新撰和歌であるが、このように、古今撰進の後、さらに「抽其勝」する仕事が勅命をもって課せられているのによれば、貫之（とすれば）の万葉五巻抄も、同じ趣旨による「抽其勝」したものではなかったか。何の目的、基準もなく五巻を抄する事はあり得ない。ましてこの文につづいて「上代之篇」を論評するほどに万葉に通じた貫之である。その「上代之篇」に対する見方をもって、万葉の「勝」に對したのであろう。醍醐が全万葉を書写したとは考え難いところだから、おそらくは、このような抄本を書写したのではなかったらうか。先にあげた栄花の記事は古今・後撰が二十巻と記すのに対して万葉のみ巻数をあげない。これも若干の巻数

だった事を示し、今の場合と同じであろう。

かくて、この醍醐・貫之によって古今集は撰定されたのである。そこには自らなる歲月による誤伝はあったとしても、彼ら延喜の歌人たちにおける万葉は、かなり確かに授受され、理解されていたと考えてよいであろう。そこには醍醐前夜における新撰万葉の、あの序文に見られるような態度も、貫之における新撰和歌の「抑夫上代之篇」という理解も、生きていたはずである。それより先か後かはともかくとして、自ら万葉を書写までするような醍醐に對して、古今集は奉られたのである。古今集における万葉は、正にこの中に把えられねばならぬだろう。

古今集における万葉の研究は、きわめて盛んである（し）。古くは安田喜代門博士が古今集の万葉歌を取上げられ、今日に継承される大綱がそこに示されたし、小沢正夫博士の最近の研究は、よく万葉と古今との谷間を照射し得た好個の著述である。それらは右に述べた古今に到る万葉のあり方を多く教えてくれるが、さらに古今集に載せられた万葉と同一の歌についても、多くの発言を見る。いうまでもなくこれは万葉に入らぬ古き歌を取めたとする古今集撰進の方針と矛盾するものなのだが、これをもって多くは古今集の万葉に對する誤認を指摘し、あるいは伊藤博氏は、氏の基準に照らして万葉と同一の歌ではないと考えられた。

しかし私はおのずから考えを異にする。古く、古今の万葉歌を指摘したのは田中道麿の「撰集万葉徴」で十一首と他に

一首を貼紙によってあげたが、近くは渋谷虎雄博士が中古中世の文献によって万葉歌を拾われ、学界は測り難い恩恵を得た(2)。古今の万葉歌についても従来の指摘はこの二書を出していない。そこでこれらに指摘された十五首に基づいて古今の万葉歌なるものを検討すると、まず

A 1月草に衣はすらむあき露にぬれてのちはうつろひぬとも
も (古二四七、秋上、よみ人しらず)

は

つまくさに ころもはすらむ あまつにぬれてのちはうつろひぬとも
月草爾衣者將措朝露爾所沾而後者徒去友

(万7一三五二)

と同じである。大久保正氏の周到な論述に真似て、前野貞男博士の推定古点(3)を右に添えた(本文は古典大系本による。以下同じ)。この両者にはいささかの相違もなく、まさに万葉歌であることは、蔽うべくもない。

2 さ夜なかとよはふけぬらしかりがねのきこゆるそらに月
わたるみゆ (古4一九二、秋上、よみ人しらず)

は

さよなかとよはふけぬらしかりがねのきこゆるそらに月
佐宵中等夜者深去良斯鷹首所聞空月渡見

(万9一七〇二)

と同じである。「弓削皇子に献る歌」三首の中の第一首で、柿本人麿歌集にふくまれるかともいわれる一首である(一七〇九左注の「歌集所出」が溯って一六八二以下とも、一七〇九のみともいう)。これも古今万葉ともに同一の歌というべきであろう。

しかし、同一歌と目される歌は、実はこの二首のみであり、他の十三首は何がしかの異伝をもっている。この内、万葉と少異をもつ歌は次の八首である。

B 3 たえず行くあすかのかはのよどみなば心あるとや人のお
もはん

このうた、ある人のいはく、なかとみのあづま人が哥也
(古14七二〇、恋四、よみ人しらず)

たえずゆくあすかのかはのよどめちらばゆえしもあることとみななくに
不絶逝明日香川之不逝有者故霜有如人之見国

(万7一三七九)

この両者については全く無関係のものとするには類似がありすぎる。必ず関係のある両歌たる事は認めねばならないだろう。しかしその相違は「よどみなば」——「よどめらば」、「心あるとや」——「ゆへしもあるごと」、「おもはん」——「みらくに」の三点にあり、第一はたやすく異伝されていく口調と思われる。しかし第二・第三は万葉のこの本文をとるかぎり、古今の句は生じ難い。それでいて内容は異っていない。このあり方こそ口誦伝承の常道であって、口誦はさらに内容まで口誦の場に適合させて変化していくものもあるけれども、今の場合は、第一次の口誦変化の型をとどめるものである。したがってこれはなお万葉からの変歌なのであって、万葉から訣別したものではない。それでいて万葉の書記された本文には関知しないものである。

4 夏びきのてびきのいとをくりかへし事しげくともたえむ
と思ふな (古14七〇三、恋四、よみ人しらず)

河内女之手染之絲乎絡反片絲爾雖有將絶跡念也

(万7一三六)

これも右と事情がひどしい。表面的にはかなり異った二歌のような印象をもつが、「夏びき」が「河内女」、「てびき」が「てぞめ」、「事しげく」が「片糸にあり」と異なるのみで、大綱に変化はきたさない。やはり両歌は同じ歌の異伝なのであって、右の最後の変化は大きい、ほぼ先の3と同じ型である。

5 おく山のすがのねしのぎふる雪のけぬとかいはん恋のしげきに
(古11五五一、恋一、よみ人しらず)
高山之菅葉之努藝零雪之消跡可曰毛恋乃繁鷄鳩

(万8一六五五、三國人足)

これも同じ。大きな相違は「おく山」——「高山」のみで、他は「いはん」——「いふも」、「しげきに」——「しげけく」という語法上の相違があるばかりである。「ね」——「は」は前者意味をなさず、本文に問題があるろうか。かつ万葉には奥山の菅の葉のしぎ降る雪の消なば惜しけむ雨な降りそ

ね
(万3二九九)

という「大納言大伴卿」の一首がある。古今集には「高山」という語は存しない。その点当面の古今歌は古今的であると共非万葉的ではない。これは先立つ諸歌よりもっと強く万葉歌に結ばれているといえよう。

6 わぎもこに相坂山のしのすすきはにいでずも恋ひわたるかな
(古11一一〇七、恋一、よみ人しらず、墨滅歌)

吾妹兒爾相坂山之皮為酢寸穗庭開不出恋渡鴨

(万10二二八三)

これも「かな」——「かも」という当時の語法上の相違の他は、「いでずも」——「さきいでず」という「咲き」の脱落、古点では「しのすすき」と訓むが、正しくは「はだすすき」であろうことの二点のみが異なるだけである。同一歌と認めてよいであろう。

さて以上四首は何れも「よみ人しらず」の歌であるが、次の二首は巻二十のものである。その一つ、大歌所の御歌は7しはつ山うちいでてみればかさゆひの島こぎかくるたなしを舟
(古20一〇七三、しはつ山ぶり)

で、これは

四極山打越見者笠縫之嶋榜隠棚無小舟

(万3二七二、高市黒人)

とひとしい。古点の「よもやま」は正しくは「しはつやま」であろうから、これは異とするに足りない。「いでて」——「こえ」のみの相違で、同一の歌であろう。また同じ巻二十神あそびの歌も

8 ささのくまひのくま河にこまとめてしはし水かへかげを
だにみん
(古20一〇八〇、ひるめのうた)

左檜隈檜隈河爾駐馬々爾水会飲吾外將見

(万12三〇九七)

の如くで、大きな相違は「しはし」——「こまに」、「かげをだに」——「われよそに」のみである。内容上は前者に相違

を見るが、万葉の「駒」の重複はこれによって避けられている。古今歌が万葉を基にしていることはいうまでもないだろう。古今人が、新たに檜隈川の、しかも民謡風な一首をなすはずもない。

さらに、

9 まがねふくきびの中山おびにせるほそたに川のをとのき
やけさ (古20一〇八二)

は左注に「この歌は承和の御へのきびのくにのうた」とあり、仁明の大嘗祭の折の歌たることが知られるが、これも

大王之御笠山之帶爾為流細谷川之音乃清也

(万7一〇二)

と類同する。万葉の初二句をその折の地名「吉備の中山」に代えたもので、「おびにせる」、「音のさやけさ」といった発想は類同を他にもつとしても、「細谷川」という固有名詞は両歌の関係を物語るものといえよう。しかし、この初二句は全く地名を代えたもので、右の諸歌のあり方とは一致しない。この事は後述するが、とにかくここに巻二十の儀札歌が三首も万葉に類同する事実を、確認しておきたい。

このグループの最後として、次の一首がある。

10 道しらはつみにもゆかむすみのえのきしにおふてふ恋わ
すれぐさ (古14一一一一、恋四、つらゆき、墨滅歌)

暇有者拾爾将往住吉之岸因云恋忘員

(万7一四七)

これは貫之の一首たることにおいて以上の九首すべてと異

質であるが、それなりに、異同も多い。まず第一に「恋忘草」に「恋忘員」がなっていることで、万葉およびそれ以前のこれらに関しては賀古明博士のすぐれた考察があるが(も、その把握された生成、発展の図式によっても、貝は草に変化していく趨勢にある。古今集には忠岑の

住吉とあまはつぐともながるすな人忘草おふといふなり

(17九一七)

という一首を載せるように、住吉の忘れ草は一つの歌枕にもなるうとしている。その中で貫之が「恋わすれぐさ」を詠むのは当然だったと思われ、それによって上句の変化が起って来るのである。ただ「道しらは」——「暇あらば」は大きな相違で、創意が働いている。その点において以上のものとは全く異なるもので、単なる口誦伝承のものとはちがう。しかし、次にあげるものとも異なる形で、ここに分類するのが正しいと思われる。

それでは、残り五首はいかなる姿をもつのか。

C11 吉野河いはきりとおし行く水のをとにはたてじこひはし
ぬとも (古11四九二、恋一、よみ人しらず)

高山之石本滝千逝水之音爾者不立恋而雖死

(万11二七七八)

これは初二句が異なる。そして初二句は後を導く序詞であってみれば、固定的な恋の常套表現があつて、それに時処をかえて序が代えられたものと思われる。これは万葉集という等質性の歌集(又しても高木市之助博士のこの卓論に従うのだが)

にあつては、むしろ平凡な風景であつて、この場合にはどちらか一方の歌を異伝したものではない。広く民衆に用いられた形であつて、時処をかえた地名や人名の入れかえは、それぞれが別の歌として歌われたものであつた。時間的な伝誦の間に異同を生じて来た、元来同一歌であつたものではないのである。吉野河を歌う古今歌として、古いものにちがいない。

12 するがなるたこのうら浪たたぬ日はあれども君をこひぬ
日はなし (古11四八九、恋一、よみ人しらず)
可良等麻里能許乃宇良奈美多々奴日者安礼杵母伊敏爾古
非奴日者奈之 (万15三六七〇、遣新羅使)

これも事情は全くひとしい。万葉の歌が異伝して古今の歌となつたというのではなくて、浦浪のたたぬ日のない事にかけて恋に絶え間のない事を歌う型があつて、それが遣新羅使の場合は現在淀泊中の「韓亭能許の浦」となり、その立場から「家」を恋うといつたもので、古今は駿河の田子の浦という歌枕の地名となり、恋歌のゆえをもつて、「君」が歌われたものである。遣新羅使が人麿の古歌を詠誦しているように、これも口誦歌の一つの応用である。元來の歌は古今と同じ「君」ないしは「妹」で、地名はその居住地によつて歌いかえられたものである。

13 いぬがみのとこの山なる名とりがはいきとこたへよわが
なもらすな

この哥、ある人、あめのみかどのあふみのうねめにたまへると

(古13一一〇八、恋三、よみ人しらず、墨滅歌)
狗上之鳥籠山爾有不知也河不知二五寸許瀬余名告奈

(万11二七一〇)

この古点は、古点が当時の伝誦歌による面のあつた事に基づく不正確さをもっているが、本文によれば、「寸許瀬」は「きこせ」で、「告奈」は「のらすな」であろう。その点に古今との少異をもつが、当面の問題として大きいのは、「名とりがは」と「いさやがは」であろう。万葉には「岳本天皇御製」(4四八七)と伝えるものにも「淡海路の鳥籠の山なるいさや川」とあり、次を導く為にも「いさや川」でなくてはならぬだろう。また「名とりがは」の所在も知らない。にもかかわらずここに「名とりがは」というのは、一つのパターンがあつて、それをここでは「名とりがは」にかえ用いたということである。そしてそのかえられた形で、「あめのみかど」(天智か)の歌として知られていたのであつて、これは万葉の右の歌とは別物なのであつた。ここには一つ、伝承が加えられたという相違はあるが、右の二首と同様地名の入れかえで、一つのパターンに基づく歌といつてよいだろう。

このあり方は右に述べた仁明大嘗祭の歌と同じで、先ものが伝誦上に生じた変化をもつていたのとはちがう、積極的な作りかえである。しかも、この大嘗祭の歌も含めて、ある型に則つた上での変化である点において共通するのである。そして、この内の非伝誦的異伝は、次の二首の場合とて、同じである。

14 伊勢のあまのあさな夕なにかづくてふみるめに人をあく

よしも哉

(古14六八三、恋四、よみ人しらず)

伊勢乃白水郎之朝魚夕菜爾潜云鯨貝之独念荷指天

(万11二七九八)

これも上句三句をひとしくするのみで、下句は全く異っている。そして海人の潜き採るのは海藻でも鯨でも可能だったわけで、そのそれぞれによって「人をあく」、「かた思い」が歌われる事になる。このあり方は、伊勢の海人という、おそらく万葉人も古今人も知識によっていたであろう（「てふ」という語にそれがうかがわれる）ものに基づいて、恋歌をなすというものである。先の型による歌と全くひとしいであろう。そうした二歌は別のものであって、古今は万葉歌を異伝したものではないのである。

同じように「海人」に基づく一首が、最後の歌である。

15 すまのあまのしほやき衣おさをあらみまどほにあれや君

がきまきぬ

(古15七五八、恋五、よみ人しらず)

須麻乃海人之塩焼衣乃藤服間遠之有者未著穢

(万3四一三、大綱公人主宴吟歌)

これも伝聞による須磨の海人の塩焼衣が間遠である（粗末である）という事に基づく恋歌であるが、両者にはかなり相違もある。つまり万葉が「藤服」というのに対して古今では「お(を)さをあらみ」といい、この両者は、伝誦上の異同ではない。さらに結句は、万葉が「いまだ着なれず」、つまり「未だその女に馴れない」(古典大系本頭注) というのに

対して、古今では「君が来まきぬ」という。まるで別の歌意であり、同じところは先に述べた須磨の海人の衣という、素材だけなのである。これは先の11以下の諸歌と全くひとしいではないか。

そしてこれは元来の一つの恋歌の口ぶりであったと思われ、そこに「須磨の海人」が登場する理由があった。それは先の「伊勢の海人」と同じものであり、さらには不知也川とも同じであったろうと思われる。この不知也川は、それ自体が名取川に代っているのだったが、そのあり方は、田子の浦(能許の泊)・吉野川と同じで、こちらは本詞の方が共通して、序詞の方が適宜代えられているものであった。そうした点において以上五首は完全に形をととのえているのであり、ひとしく民謡風なものである事においても一致している。その点先のグループにあげた仁明大嘗祭の一首も同じである。そしてこうした恋の民謡であることを裏書きするかのようには、万葉のこの一首は人主の「宴吟歌」だというのである。古今の一首は万葉のこの歌を真似たのではない。ともに基づく、一つのパターンによって両者が出来上っているのである。

さて以上長々とあげたものが、いわゆる古今集の万葉歌なるものである。これらは以上の考察によってまず三つのグループに分けられた。すなわち、

A 1 2

B 3 4 5 6 7 8 9 10

C 11 12 13 14 15

である。ただし789は卷二十の大歌所の歌・神あそびのうた・御べのうたという儀礼歌で、そのあり方は9がCと同じであり、また10は創意の働いた貫之の作たることにおいて、多少異質であった。そこでこれらを勘案して言えることは、万葉歌と全く同じか、ないしはその異伝と思われるもの

(a) 1 2 3 4 5 6

と、万葉の異伝ではなくて、ともに民謡的口吻に同じく立脚しながら別の歌であるもの

(b) 11 12 13 14 15

とに区分されることである。それ以外の特殊なものが

(c) 7 8 9 10

である。最初の問題に戻って、もし古今集が万葉歌を含んではならぬとすれば、右の(a)はあつてはならぬ歌々であり、(b)はあつてもよい歌々だという事になる。

そこでこの(a)(b)を検するに、(a)の所屬する万葉の諸卷は、

卷七 (1・3・4)

卷八 (5)

卷九 (2)

卷十 (6)

となり、Bとして含めた(c)の9・10もともに卷七である。それに対して(b)は

卷十一 (11・13・14)

卷十五 (12)

卷三 (15)

となる。そして(c)の残りは卷三(7)卷十二(8)である。これら(a)(b)は、きわめて整然とした区別を示しているではないか。再言すれば、古今にあつてはならぬ歌は卷七以下四卷の歌に限られるという結果なのである。また、(b)は卷三・十一・十五と散在するようだけれども、先に述べたごとく、すべて恋の常套表現を借りたものであった。卷三の人主の歌は「宴吟歌」で、個人人主による創作歌ではない。卷十五の遣新羅使の歌も、詠誦の古歌を当所に口誦したものであつて、これも衆人の口頭にあつた没個性歌である。つまりこれらはすべて万葉の等質的恋歌であつて、卷十一をその一部とするものなのである。

もっともこの性格は(a)とても同じで、この中の唯一の作者は三人人足であつたが、その歌よりもっと古今に一致する上句を歌うのが「大納言大伴卿」であつた。これも人足・大伴卿そして某古今人によつて歌われたもののみが記録として残りはしたけれども、広く民衆歌の基盤に立つものであつた。後述のごとく万葉歌の授受が口誦伝承に大きく委ねられていたという事実を無視することが愚しいとすれば、この古今の万葉歌なるものがごとく作者未詳歌の性格をもつたものであることは、重大な事といわなければならぬ。

そこで問題となるのは、この中の唯一の作者高市黒人をもち、逆に古今集としても唯一の作者貫之をもち、かつ(a)(b)何れにもまたがる性格をもつた、(c)群四首であろう。僅々十五

首の万葉歌の内、三首までを巻二十が占めるということは、重大な事である。また、従来いわれたように、墨滅歌なるものが万葉との類同の故をもってなされたのだとしたら、右の789といった諸歌が平然と巻二十に並べられているのは、おかしい事ではないか。

そこにこの巻二十の特殊性があったと思われる。この巻頭は「おほなほびのうた」と記された

あたらしき年の始にかくしこそちとせをかねてたのしき
をつめ (古20一〇六九)

という一首で、「日本記には、つかへまつらめ万代までに」

と左注されるように、続日本紀聖武天平十四年正月の賀には

新しき年の始にかくしこそ仕へ奉らめ万代までに
と歌われ、万葉では天平二年梅花の宴が

むつき立ち春の来たらばかくしこそ梅を折りつつ樂しき
をへめ (万5八一一五)

という「大式紀卿」の挨拶から始められている。つまり巻二十は宮廷に行なわれ伝えられた古歌を集めた巻であって、次に「ふるきやまとまひのうた」がつづき、神あそびの一首として

まきもくのあなしの山の山人とひとみるがに山かづら
せよ (20一〇七六)

といった古歌も連ねられる。この「古歌」の中には、かりに万葉と一致するものがあるが、それはすでに万葉歌としてよりは、大歌所の歌として承認していたのであって、万葉歌と

の重複とは認めなかったのである。当面の操作において789を特殊と認め除外した理由はそこにある。

つぎにこの十五首の中に墨滅歌の三首含まれることは、万葉との重複に気づいて除いたといわれることと関連して、当面の重大な問題であろう。その中には貫之の一首も含まれている。

もし墨滅歌が万葉との重複の故に除かれたのだとすれば、右の十五首のうち墨滅歌は三首(6713)にすぎない。残り十二首の内から右の巻二十の三首を除いたとしても、他の九首はなぜ墨滅の運命に会わずにすんだのか。ことに全く同一の123などはなぜ残り得るのだろう。また逆に、古今の墨滅歌十一首の内、万葉と重複するとは思われない八首は、なぜ墨滅の運命に会ったのか。墨滅歌が巻十に五首、巻十一に二首、巻十三に二首、巻十四に二首と偏在していることから、墨滅の理由に万葉との重複をあげるとは、いわれのない事ではないかと思われる。ただいえることはやや古風な歌が除かれている傾向で、恋歌においては、衣通姫の一首、古事記にも見られるもの(14一一〇)が除かれ、先の「いぬがみの」の歌は「うねめのたてまつれる」返歌(13一一〇九)と共に除かれている。この「あめのみかど」を天智とすれば、衣通姫同様、古今歌の時代からはずば抜けて古い。もし聖武という説に従っても、平城を上限とする古今時代の天子には距りがありすぎる。まさしく貫之のいう「上代之流」が除かれるという一つの基準があったのではないか。

もちろんこの「うねめ」の歌の除かれたのは、十一首あとに同歌があり(13六六四)、その重複のゆえもある。また物名においても貫之の歌が二首除かれ、十一首の内三首までを貫之が占めるとするのは、かなり厳しい歌の吟味があったと思われ、総体的な歌の出来、撰集そのものの出来を考えるという、高い志向があったと考えられる。その内の一つとして「上代之流」を除こうとしたのではなかったか。

もしそうだとすれば貫之の「道しらは」の歌の除かれたのも、万葉との重複ではなくて、「上代之流」として除かれたということになる。すでに述べたごとくこの歌と万葉との関係は、同一の異伝のごとくでありながら積極的な創意も持っていた。かつ同時代にも忠岑歌のごときがあった。貫之は万葉風に依りながら(この関係は後述する)、一首を創作したのだが、結果としては「上代之流」を脱することが出来なかった。そこに墨滅の与えられる運命を得たというのではなかったか。

そこで問題を元に戻して、かく大歌所の歌および墨滅歌が処理し得るとすれば、やはり古今集にとって、重複する万葉歌とは巻七以下四巻の歌だということになり、それ以外は伝承の古歌あるいはそれに基づく別の歌だということが確認できる。それに対して古今集は「万えうしふにいらぬふるきうた」を奉らしめて成ったのである。この状態をもっとも質朴に理解すれば、万葉の巻七・八・九・十は、「万えうしふ」ではなかったということにしかならない。

もしこれらが「万えうしふ」であるとすれば、古今集は嘘をついたことになる。この序には先稿で吟味したように人麿を正三位とするような誤りもあった。だから、この混入もあってよいかもしれぬ。しかしそこで述べたように、この序の誤りは一貫した底流に支えられたものであって、それなりの必然をもったものであった。その誤りを撰歌の中に持ち込むことは、今の場合はむしろ逆であって、万葉を勅撰と考え、それに「入らぬ」歌を撰してもって晴の勅撰となすのが、むしろ序の誤りに近い態度である。やはり巻七以下四巻は「万えうしふ」ではないのである。

なお春日政治博士は通行本以外に万葉歌を指摘されているが(5)、その中で右以外に姿を見せるものは、まず、

しながとりゐな野をゆけばありま山夕霧立ちぬあけぬことでは誰ならなくに小山田のなはしろ水のなかよど

みする(恋五)

で、前者は元永本以外新古今集に見られ、後者は元永本、清輔本片仮名書人にのみ残るものとされる。前者は

志長鳥居名野乎来者有間山夕霧立宿者無而

(万7一一四〇)

と類似するが、ただ結句は万葉本文から導かれる体のものではないだろう。やはりここにも伝誦上の変化を考えなくてはならない。

後者は

事出之者誰言爾有鹿小山田之苗代水乃中与杼爾四手

(4七七六、紀女郎)

と類似する(前野博士の推定古点を欠くので訓は添えない)。

この相違は第二句が大きく、結句は口調の相違をもつ。

これらは大きいえば兩者とも先の(a)に繰入れられるべきものである。しかし、前者の結句は、この一首としての意味をなし難くしていると思われるのだが、いかがであるう。

「夕霧が立って夜が明けた」とは、私には難解である。先の

「菅の根」の類と同じであるが、それは「ね」「は」という

類似の考えられるもので、これは元よりそれもない。また後者は伝誦上の変化として首肯できるものではあるが、先にあげた如く諸歌はすべて作者未詳歌に関するものだったのに対して、これは紀女郎のもので、家持に贈った事が明記されて

おり、かかる例は黒人の大歌所の歌しか存しなかった。これが巻四の一首であることも上例とは異り、それなりに重大ではあるが、暫く例外とする以外にない。

また博士は先にあげた15の「すまのあまの」(古七五八)

と類似する

すまのうらのしほやき衣なれたればうとくのみこそもえ

わたりけれ (13六四九の次、恋三、よみ人しらず)

をあげられるが、これは

志賀乃白水郎之塩焼衣雖穢恋云物者忘金津毛

(万11二六二二)

と類似する(推定古点なし)。微細にわたってはかなり相違

するのに、ここで取上げるのは、「志賀」——「須磨」という地名の入れかえ(その他に「海人」が「浦」にもなる)をもって上の序詞が次の本詞を導くからで、その本詞に異同を見るのである。これは先の(b)形にひとしい。これも巻十一である(なおこの他に博士は「あすよりはわかなつまむと片岡のあしたの原はけふや焼くらむ」をあげられるが、これは赤人の歌ハ8一四二七)と初句などを類似させるが、類歌関係と認められぬので、ここでは省く)。

さて、こうして流布本以外に徴しても先の傾向が生きているとすれば(一首不明のものはある)、古今集に与えられた万葉は十六巻の内容のもの、ないしはそれ以下のものになる。それらを掲げれば、

巻一・二・三・四・五・六

巻十一・十二・十三・十四・十五・十六

巻十七・十八・十九・二十

ということになる。これらが、「万えうしほ」ではなかったのか、ということである。したがってこの中にも巻七以下四巻の如きものが含まれていないともかぎらない。しかし、これらがかかなり整然としていたこともまた事実である。第一群のものは万葉冒頭の六巻で、中には巻五のようなノート風のものもふくまれるけれども(貫之に巻五の歌と類同がある。後述)、とにかく格調ある万葉集である。対して第二群は十四までが作者未詳歌群、十五・十六が特殊な独立的巻々であり、その特殊性は相聞往来の一大集成ともいふべき十一・十

二、儀礼歌集とも見られる十三、東歌の十四にもある。第三群はいうまでもなく家持中心の万葉である。しかし、ここでは、あくまでも、巻七―巻十が「万えうしふ」ではなかった、他のある巻々もそうであったかもしれないという事のみを、いうべきであろう。

六 後撰集まで

そこで興味深く思われる事柄は、当代の古今集以外に採られた万葉歌である。まず秋萩帖(集)の万葉歌はすでに大久保正氏の論稿(6)に詳しく掲げられているので、ここでは大凡のみを記すと、

万葉卷一、七四

大行天皇

卷二、八九

磐姫或本歌

卷三、二九四

角曆

卷九、一七一五

槐本歌

卷十、二三二八

(詠雪)

卷十七、三九一一

家持

の六首で、古今集の六首が巻七―十に執したのとはまるで異質である。この万葉の内容も最後のものが初句を「みよしのの」(万いあしひきの)と代える程度でほとんど同じである。もちろん秋萩帖は万葉歌を採らぬなどとはっていない。

また継色紙集の万葉歌は金井清一氏によって詳細に検討されているが、それによると、

万葉卷四、六六四 大伴像見

同 六五七 坂上郎女

卷十一、二六七

同 二八三八

同 二八三九

卷十三、三二六七

の六首である。もっとも全く同一のものは第一のもので、第二は上二句しか掲げない。他四首も微細な異同をもつ。そして、ここにおいても古今集との異質さに驚かざるを得ない。巻七―十は一首もなく、古今において万葉歌ではないといった歌に三首を見た巻十一はここでも半数を占める。

これら二書は古今集撰進に先立つと推定されているものである。それらが「万えうしふ」であったかもしれない諸巻の歌を採りながら、古今ではそれが影をひそめて、「万えうしふ」を採らぬ古今には巻七―十が採られているという事実を、どう理解したらよいであろう。

これらより成立は下るかもしれないが、伊勢物語にも多くの万葉歌が指摘されている。これも金井清一氏の調査(8)を恩借して掲げると、氏のいわれる「万葉類歌」の巻別状態は次の如くなる(下は伊勢物語の古典大系本の段数。底本は三条西家旧蔵本)。

万葉卷二、一四九

倭太后 (二十一一段)

卷三、二七八

石川少郎 (八十七段)

卷四、六一七

山口女王 (三十三段)

同 六三三

湯原王 (七十三段)

同 七六三 紀女郎 (三十五段)

卷七、 一二四六 古歌集 (百十二段)

卷十一、 二四二二 (七十四段) 書承

同 二六六三 (七十一段) 改作

同 二七五三 (百十六段)

卷十二、 二九八五・二九八六 (二十四段) 改作

同 二九一九 (三十七段)

同 三〇三二 (二十三段) 書承

同 三〇八六 (十四段)

卷十四、 三五〇七 (三十六段)

氏によればこの他に小式部内侍本に六首があり、巻四に一首、巻八に一首、巻十一に三首のよしであるが、さらに氏はこの中で右に記した四首については、書承・改作を主張されている。当面の私にとって氏の研究が貴重であるのは、ここでも又しても巻七以下四巻は百十二段の一首、小式部内侍本を加えれば他に一首のみであり、巻十一という古今集に多く見られた非万葉歌の巻およびそれと一体をなす巻十二が合わせて七段という半数に近い数を占めることである。そしてこの十一・十二両巻は、他の口承と異った書承・改作のものをもつということである。これは、少くとも巻十一・十二が書物として存在していて、かつ万葉集を名に負っていたと思われるもので、そうであれば、古今はそれを重複させることはあり得ないのである。ここで巻七の一首は
須磨のあまの塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきに

けり(伊勢)

之加乃白水郎之焼塩煙風乎疾立者不上山爾輕引 (万7 一二四六)

というもの(推定古点なし)、先と同様「あま」にかけた一首であるが、その地名は須磨という身近なものに代えられ、第四句および結句に相違をもつ。そしてこれを万葉歌とするのは四氏(福田良輔・池田龜鑑・山田孝雄・鈴木知太郎諸博士)で、金井氏が支持者数によって万葉歌とした内ではもっとも少ないものである。

またこれ程明瞭な形ではないが、忠岑の和歌体十種にも万葉歌は四首ある。すでに山田孝雄博士らの指摘されるところであるが(9)、その四首は

万葉巻六、 九一九 山部赤人(古歌体)

卷八、 一四三五 厚見王 (器量体)

卷十三、 三二三一 (神妙体)

卷十九、 四二七七 藤原永手(華艶体)

のごとくで、その訓みはきわめて正確というべきものである。その中に巻八の一首が存することは、これら諸巻がすでに書承されて万葉と称せられていたと考える場合に、古今集と矛盾することになるが、この問題は後に述べよう。忠岑は古今集の中で「ふるうたにくはへてたてまつれるながうた」(19 一〇〇三)をつくり、

あはれむかしべ ありきてふ 人まるこそは うれしけれ 身はしもながら ことの葉を あまつそらまで き

こえあげ すゑのよまでの あととなし

といい、「夏くさのうへはしげれるぬま水のゆくかたのなきわがころかな」(古10四六二)が人麿の「池の堤の隠り沼の行方を知らに」(万2二〇二)と関係があるかと思われる歌人で、万葉を全く知らなかったとは考えられない。その中でとくに巻六の一首を「古作」としてあげることは、かなり万葉の古歌にも親しむところがあったといえよう。なお問題の厚見王の一首は古今六帖・新古今集・夫木抄・新朗詠集にも見えるものである。

さて、以上古今集周辺の諸書における万葉歌を見たが、これらを再度総覧してみると

巻一 秋

巻二 秋・伊

巻三 秋・伊

巻四 継・継・伊・伊・伊

巻六 十

巻七 伊

巻八 十

巻九 秋

巻十 秋

巻十一 継・継・継・伊・伊・伊

巻十二 伊・伊・伊・伊

巻十三 継・十

巻十四 伊

巻十七 秋

巻十九 十

の如きであり全三十首中巻七―十は四首にすぎない。万葉集を採らぬとはいわぬ撰集(および物語)がこのような傾向を示すのに対して、古今が逆の傾向を示すのは、古今の「万えうしふ」にますます問題が集中して来るといってよいだろう。

しからば忠岑同様古今集の撰者たる貫之はどうなのか。その著新撰万葉をみると、この中にも十余首の万葉歌が抽出されている(10)。ここでも金井清一氏に従って十一首を掲げる(11)と(新撰和歌は群書類従本、万葉は古典大系本による)次のごとくである。

1 武士の八十宇治川の網代木にたたよふ波のゆくへしらすも (恋雑)

物乃部能八十氏河乃阿白木爾不知代経浪乃去辺白不母 (万3二六四、人麿)

2 なぬかゆく浜の真砂と我恋といつれまされりおきつ白波 (同)

八百日往浜之沙毛吾恋二豈不益歎奥嶋守 (万4五九六、笠女郎)

3 石上ふるとも雨にさはらめやはんと妹にいひてしもの (同)

石上零十方雨二将関哉妹似相武登言義之鬼尾 (万4六六四、大伴像見)

4 塩みては入ぬる磯の草なれやみるめすくなくこぶらく多
し (同)

塩瀦者人流磯之草有哉良久少恋良久乃大寸

(万7一三九四)

5 あすからは若菜摘むとしめし野に昨日もけふも雪は降り
つつ (春秋)

従明日者春菜將採跡標之野爾昨日毛今日毛雪波布利管

(万8一四二七)

6 蛙なく神なひ川にかけ見えて今や咲らん山ふきのはな
(春秋)

河津鳴甘南備河爾陰所見而今香開良武山振乃花

(万8一四三五、厚見王)

7 卯花もいまたらぬに時鳥さほの川原にきなきとよます
(夏冬)

宇能花毛未開者雀公鳥佐保乃山辺来鳴令響

(万8一四七七、家持)

8 秋の露うつしなればや水鳥のあをはの山のうつろひぬ蘭
(春秋)

秋露者移爾有家里水鳥乃青羽乃山能色付見者

(万8一五四三、三原王)

9 さをしかの朝たつを野の秋萩に玉とみるまでおけるしら
露 (同)

棹壯鹿之朝立野辺乃秋芽子爾玉跡見左右置有白露

(万8一五九八、家持)

10 いもかひもとくと結ふとたつた山今そ紅葉の色まさりけ
る (同)

妹之紐解登結而立田山今許曾黄葉始而有家礼

(万10二二二一)

11 岩の上に立る小松の名ををしみことにはいはす恋こそわ
たれ (恋雑)

巖上爾立小松名惜人爾者不云恋渡鴨

(万12二八六一或本歌)

磯上生小松名惜人不知恋渡鴨 (右本歌)

これらは右に示したごとく少しずつの相違点を持つ。その点では万葉の本文を離れたものが大半で、3が本文の転倒でもあれば、また5が「従」を「から」、「春菜」を「わかかな」と訓めば、この二首のみが比較的本文に忠実なものといえるのみである。また十一首の内作者未詳歌が三首のみであるということも、古今集とは著しい相違点である。これは一つには序にいう「花実相兼」のものを抽出したという理由によっているであろう。しかしその事は又後でいうとして、ここで先の諸書との比較において、もっとも大きな相違はこの十一首中巻七十一を七首も持つ事であろう。それ以外のものは巻三と十二に一首ずつ、巻四に二首であるに過ぎない。これは上の諸書と全く逆の傾向であり、そこに新撰和歌と古今集とが同じ立場にありながら他と異質であるということを、確認せねばならぬ。

古今集と同じだというのは、いうまでもなく、その序を指

している。すなわち新撰和歌の序には

抑夫上代之篇義尤幽而文猶質下流之作文偏巧而義漸疎故
抽始自弘仁至于延長詞人之作花実相兼而已

といっている。これによれば貫之は「文巧」にして「義幽」なるものを「花実相兼」たるものと考へ、弘仁から延長（八一〇—一九三〇）の間のそれを抽いて新撰和歌をなしたことになる。天慶六・七年のころの擲筆であろうか。この三六〇首は群類本では三首不足しているがその大半、二八〇首ほどは古今集のものである。したがって残りの八十首ほどを新たな資料によって加えた事になるが、延喜の古今集撰進以後においても二十年ほどの年があり、その間のものおよび古今に入らなかつた歌がその八十首だという事になるはずである。

しかし、実際には右のごとく弘仁以前の歌が十余首加えられてゐるわけで、少くとも貫之においてはこれらは「自弘仁至于延長」間の詞人の作品でなければならなかつた事になる。その中に巻七十を七首含むということは、やはり古今集同様これは「上代之篇」ではなかつたとしか考へようがない。またこれは一人貫之のみならず古今の撰者全体の認定でなければならぬはずで、忠岑とて同じであろう。実は忠岑十体の巻八の一首（一四三五）は新撰和歌にも含まれるものであり、後述のごとく貫之自身の作にも影響を与えているものである。

したがって新撰和歌における序との矛盾は、十一首をもつて言われるべきではない。少くとも残り四首について言われ

るべきであるが、その四首についてはまた後述しよう。しかし、万葉を排すると言明しない諸書と、万葉を排したと称する二書とが、巻七十をもって区別されるということだけは、ますます強くなるように思えるのである。

それでは次の勅撰集、後撰集においてはどうか。後撰集の万葉歌が古点によるものであるか否かは大きな問題で、梨壺の五人による施訓の結果後撰集に万葉歌が入つたとすれば、後撰の万葉歌は正統に万葉を継承しているはずであるし、又逆に施訓作業と後撰撰進とが別の作業であり（併行的には行なわれたであろうが）、かつ後撰が勅撰集の權威によって万葉を排除したとすれば、後撰の万葉歌は古今集のそれと同じ立場に立つこととなる。近時のこの研究は目ざましいものがあるが、久松潜一先生が直接万葉研究の結果にもとづいたとは見られないといわれるなど¹²⁾、最近の成果はこの後者の方に傾いている。その研究の経過は、大久保正氏の周到にしてかつ簡要を得た論¹³⁾に示されるごとくである。すなわち後撰集の成立は天曆九年（ないしはそれ以後天徳二年以前）で、古点の完成はそれより十年前後おくれた康保年間であつて、かつ内部徴証の結果からも万葉直接の採録とは考えられず、さらに勅撰集たる後撰集が、当時勅撰をもつて信じられていた万葉集から歌を再録することはない、というのである。

そこで問題となるのは古今集と全く同じく、後撰集がなぜ万葉歌を持つつかという事柄である。中村久氏はこれを混入と

され(15)、奥村恒哉氏は自己の見た資料によって万葉に対する異伝をあげるつもりか訂正するつもりかで取上げたのだらうとされ(16)、大久保正氏は両者の場合の考えられることを述べておられる。

しかし、事はおおよそもっと簡明な事だったのではないか。後撰の万葉歌も数え方が人によって一定しないが、ここでも精細な大久保正氏の決定に従わせてもらい、別に一首を加えればそれは次のごとくである。

万葉卷四、	六〇六笠女郎	後撰卷十八、	一二九九均子
卷八、	一四二六赤人	卷一、	二二
同	一四四一家持	卷一、	三三
同	一四四八家持	卷四、	一九九
同	一四七六小治田広耳	卷四、	一七七
同	一五七二家持	卷六、	三〇五
卷十、	一八三九	卷一、	三七
同	一八七五	卷二、	六二
同	一九三八	卷四、	一八七
同	一九七二	卷四、	二〇四
同	二〇三〇	卷五、	二四四
同	二〇五五	卷五、	二三九
同	二〇七八	卷五、	二三四
同	二〇八五	卷五、	二四三
同	二〇九九	卷六、	三〇〇
同	二一〇〇	卷六、	二九五

同	二二八一	卷七、	三七七
同	二一九四	卷六、	三五九
同	二二一一	卷七、	三七六深養父
同	二三〇〇	卷七、	四四一貫之
同	二三二八	卷一、	二三
同	三〇三八	卷十、	五八二
同	三三三八	卷十一、	七四四貫之
卷十七、	三九六一家持	卷十、	六七一黒主

以上二十四首である。これを一見してわかることは卷八・十の多いことで、これによって二十首を占めることは卷八・十二・十七は僅か四首のみである。これは何という整然さだろうとさえ、私は思う。先に掲げたごとく、秋萩帖以下の四書においては卷七―十は三十首中の四首にすぎなかった。卷八・十だけではそれぞれ、僅か一首ずつなのである。それについて古今集で万葉歌と目されるものは卷七―十のみに限られた。同じ貫之の新撰和歌では十一首中七首を卷七―十が占めたのだった。この二書は万葉を排した。同様に万葉を排した後撰がやはり二十四首中二十首を卷八・十で占めるのである。

この後撰の万葉歌が卷八・十に集中することについて、世に、「平安朝上半期文献に共通する事実であり、決して後撰集のみに現れた特殊現象ではない」という議論があり、またそれが当然の帰結として承認されている。しかし上述の凡庸な作業によった結果においても、これは平安朝上半期に共通する事実などではない。古今六帖の性格は複雑だけれども、

その含む万葉歌をかりに数量的にのみ報告しても、万葉諸巻に対して古今六帖の万葉歌の占める百分比は

卷十一 一二〇(%)

卷四 一〇三

卷十 九四

卷十二 八七

卷八 八一

卷二 七八

卷七 七五

卷九・十三各七〇

のごとくであって、卷八・十を特出せしめるものではない。後撰には右に最大の卷十一すらないのであり、二位の卷四は一首、四位を占める卷十二とて二首にすぎず、逆に六帖では順位の低い(同前の百分比四九%)卷十七を一首もつのである。したがって右の後撰の万葉歌のあり方は重大な意味をもつものであるといわなければならない。

そしてまた、この万葉歌は、万葉の卷八・十が後撰の四季卷七の秋下までに現われて、以下恋に三首(万葉の卷十二・十七歌)、雑歌に二首(同じく卷四歌)が現われるという形をとる。万葉は恋に執する歌集である。そして梨壺という後宮の一角において後撰が撰せられ併行して万葉が訓かれたという事の暗示するもの、たとえば俊成が古来風体抄において述べたごとく、万葉の訓読が万葉の女の世界への糸口であったというような事は、結果としてあり得る事である。しかし、

にもかかわらず、後撰において万葉は中核を恋には関係させないのである。卷八・十の、後撰の万葉歌の八割強を占めるものは四季にあつて、それ以外の万葉歌の四首中の三首が恋に見える。かつ雑歌に見える万葉歌も、元は恋の歌である。

このあり方は卷八・十という万葉歌が後撰集において、散漫にあつかわれたのではないこと、したがって他の四首こそむしる散在する印象をもつこと、と同時に、卷八・十(広くいえば卷七以下四卷)が一般的に考えられる万葉と後撰との関係に背き、それ以外の四首がこれに背かないということを知えてくれるだろう。これ又重大なことではないか。

そして又、先に古今集の万葉歌について吟味したような事は、それほど画一的には果せないけれども、後撰についても可能である。

我も思ふ人もわするなありそ海の浦吹風のやむ時もなく
(後18一二九九)

吾毛念人毛莫忘奈和丹浦吹風之止時無有
(万4六〇六)

この両者のもっとも大きな相違は第三句であるが、それは「おほなわに」という現代万葉学をもってしても未詳の語句が「ありそ海」という地形の名称に代えられているのである。先の古今の(b)とひとしいものである。

月かへて君を見むといひしかと日たにへたてすこひし
きものを
(後11七四四)

月易而君乎婆見登念晴日毛不易為而恋之重

(万12三二一三)

この両者は下三句において著しい距りがある。まさしく杉谷寿郎氏のいわれるように(16)万葉から直接とったとはいい難いものであって、大久保氏の労になる他本の対校をもっても近づけ難い。これも古今の(b)の場合とひとしいものであって、たとえば

「あき田か(一慶)かりほのやとのにほふまでさけるあきはき「みれとあかぬかも」(片ほか) (後6二九五)

秋田菊借盧之宿丹穂経及咲有秋芽子雖見不飽香聞

(万10二一〇〇)

などのごときわけにはいかない。以下

かくてふるものとしりせばよはにおきてあくれはきゆる

つゆならましを(後10五八二) 堀ほか「かくこふる」

如此將恋物等知者夕置而且者消流露有申尾

(万12三〇三八)

しらなみのさはくいりえにこくふねのかちとりあへぬこひもするかな(後10六七二) 桃ほか「よするいそまを」

白浪乃余須流伊蘇未乎榜船乃可治登流間奈久於母保要之

(万17三九六一)

伎美

の如くて、近づくかに見えて完全には近づかないのがこの四首の特徴である。そうした地名の代替や距離は、必ずしもこの四首のみが排他的にもって、他の二十首に絶無だというわけではない。しかしこの四首については以上の如くて、その特性は古今の(b)に近いのである。

そして最後にもう一つの事をいい添えれば、二十四首中に

作者名をもつのは後撰巻一、二二の汀ほかの赤人(大久保氏による)、巻七、三七六の堀ほかには欠く深養父(同)そして貫之が二十首のものであるのに対して、四首には黒主(万では家持)、貫之(万では作者未詳)、均子内親王(ただし承はよみ人しらず。万では笠女郎)のごとく三首までが作主を告げる歌である。均子内親王は「寛平母中宮温子」「寛平皇女」と注され、何れも遙か先代の人々による古歌だという認識のもとに入集せしめているのである。その点が諸本一致してあげる作者名のほとんどない二十首と大いに異なるところである。二十首はいわばほとんど無名の歌群であり、四首はある由緒をもった古歌だったわけである。

さて、以上長きに失したけれども、これをもって私の傍証としたかった目的は、古今集における巻七以下四巻は、「万えうしふ」ではなかったのだということである。秋萩帖、継色紙、和歌十体、伊勢物語をその対極におき、新撰和歌、後撰集をその同じ側においてみる時、その正反対の性格はよく反映し合って、おのが身を語ってくれるのではないか。その語るものは、「万えうしふに入らぬふるきうた」をもって撰したという古今集序文の正当性である。

そして、もしこれが正当な立言だとすれば、十世紀の初頭において、現在我々の目にする如き二十巻を万葉集はととのえていなかったということになる。のみならず爾後五十年、天曆の世までもその万葉集は姿をかえていないということに

なる。少くとも貫之ら四人の古今集撰者や梨壺の五人たちは、後撰集成立の時まで巻七・八・九・十の四巻を万葉集とは認めていなかった（ないしは万葉集としての四巻を知らなかった）ことになる。

しかし、古今集には巻七の三首、八・九・十の各一首ずつの、明らかな万葉歌が存在する。後撰集にはさらに多く、巻八の五首、巻十の十四首が見られる。これは厳然たる事実である。もしかれら載せる万葉が存在しなかったとしたら、撰者たちは知りようもなく載せるすべもなかったはずである。しからば、これはどうしたのか。（未完）

註1 古今と万葉との関係を論じたもので披繙し得たものは、次のごとくである。

春日政治博士「古今集刪修と万葉集の歌」国語国文の研究

十二号・十三号（「万葉片々」六五頁—一〇二頁所収）

安田喜代門博士「古今集時代の研究」

尾上八郎博士「万葉集と古今集と」春陽堂万葉集講座二巻

久松潜一先生「万葉研究史」二五頁—二九頁

窪田章一郎博士「万葉集と古今集との間」文学十八巻九号

同「万葉集と古今集」学燈社国文学四巻一号

服部喜美子氏「古今集読入しらずの歌と万葉集」文学語学

十八号

北住敏夫博士「古今集と万葉集の比較」学燈社国文学二巻

七号

小沢正夫博士「古今集の世界」

大久保正氏「古代万葉集研究史稿（その二）」北海道大学文学部紀要十巻

大久間喜一郎氏「万葉集から古今集へ」明治大学人文科学研究所輯（古代文学の源流）三七頁—六〇頁所収

市村宏博士「万葉と古今をつなぐ橋—家持・篁・行平・業平・小町—」文学論藻二六号（万葉集新論）三一—頁—三二八頁所収

川口常孝氏「万葉から古今へ」語文三輯

伊藤博氏「古今の万葉—万葉六四号特集—古今と万葉」古代ノート八号

2 「古文獻万葉和歌索引」

3 「万葉訓点史」

4 「万葉集新論」五九二頁—六一〇頁

5 註1の前掲論文

6 註1の前掲論文

7 「万葉集歌の伝承—継色紙集の場合—」万葉三九号

8 「伊勢物語における万葉歌」関東学院短大論叢二八集

9 「万葉集と日本文芸」十九頁—二十頁

10 久曾神昇博士「平安稀観撰集解説篇」

奥村恒哉氏「新撰和歌の原形」芸林四巻三号

野中野水氏「新撰和歌成立論」平安文学研究十一集

重松泰雄氏「新撰和歌論—偽書説の検討—」佐賀竜谷学会紀要二号

11 「新撰和歌における万葉歌」万葉七曜会報告

12 「万葉集研究史」三四頁

- 13 「古代万葉集研究史稿（その三）」北海道大学文学部紀要
十五卷二号
- 14 「後撰集の万葉歌の考察」文学論藻二号
- 15 「後撰集成立の時期についての考察」日本文学史研究二十
号
- 16 「後撰集の万葉集歌」りてらえやぼにかえ一号